

わらべうたで遊んだ経験が家族に与える変化

— 文化や自然を感じることでどんなことが起こるか —

坂本叶子

(安田女子大学大学院文学研究科)

目的

たかぎ(2009)は「素朴なわらべ唄は、理にかなった現実の世界、“現実と合理の世界”。現実と対決するもの。郷土の歴史や自然と人とのかかわりを教えたり、社会のルールや人間関係の重要性を子どもに感じとらせるよう、昔の人が苦心してつくった“生き方を教える”唄。」であると述べている。子ども達の遊びが集団から「孤立化」、創造性が「産業化」、自然性が「機械化」してきたなかで、人と人との触れ合いを保障することが子どもの発達には欠かせない(高萩, 1995)。わらべうたは関わりがないと遊べないものがほとんどで、歌詞や遊び方は自分たちに合わせて変化させることが許されるため、創造的で自然である。つまり、子ども達の遊びに必要なものが詰まっていると言えるのではないだろうか。

本研究では家庭に焦点をあて、どんなとき家で歌い遊んでいるのか、そのときにどんなことを感じ、どのような変化が生じているか検討する。

方法

(1) 調査場所

広島わらべうたセンター〈空色の家〉(以下、空色の家)は、1994年にわらべうたをより深く学びたいという有志により生まれた会である。わらべうたや詩の世界を遊ぶ小学生の集まり「詩音塾(しおんじゅく)」、福祉や教育などの現場でわらべうたを実践する人たちの勉強会「ひふみよ」、親子遊びの会「やっすんすん」など多種多様な人々が集まる。親子遊び「やっすんすん」は、月に1回親子遊びの時間である。内容は子どもの様子(発達や関わり程度)や、周りの環境(季節、自然な差し出し方)などさまざまな視点から構成する。年齢も問われない。母親たちは子どもと一緒に手をつないだり、抱っこしたりしながら参加する。また他の子どもを見たり、スタッフの動きを手伝ったりするなど協力的で和気あいあいとした雰囲気を感じられる。センターの都合により2015年12月に会は終了した。

(2) 調査対象

「やっすんすん」または「詩音塾」に1年以上

通っていた親子のうち研究協力の同意が得られた、2家族を調査対象とした。

(3) 調査内容

わらべうたに対する感情、家庭で歌われている場面について語っていただいた。合わせて「やっすんすん」への参加状況、父親とわらべうたのかかわりについて調査した。

結果

(1) 家族 A

〈母 A の語り〉3歳の息子がどんぐりを見つけたときに自発的に『どんぐりころちゃん』を歌った。「子育ては思い描いていたものとは違う」「改めて、かわいいなって思える瞬間になるなって」

(2) 家族 B

〈母 B の語り〉姉 B が興味のなかった妹 B に歌ってあやした。歳の離れた子どもたちが一緒に遊ぶ「わらべうたってすごいなって思った」「うちの子どもこんなことできるんだ」

〈父 B の語り〉「一緒にしたいかって言われると。やっているのを見るのは楽しい」ノスタルジックなもの、日本らしいを「理解できるものが広がるだろうな」「聞いたことあるレベル」の自分よりも子どもたちは「経験したレベル」

考察

今回の調査から以下の2点が考えられる。

(1) わらべうたはその特性から「生活」や日常の「遊び」に入り込むことができる。その経験から母親は子どもに「こんなこともできるのか」と成長を感じ、子育てへの気持ちの変化を生じさせる可能性がある。(母 A、母 B)

(2) わらべうたの経験がない家族と歌い遊ぶことは難しいが、「楽しそうだ」という印象やうたの特性を間接的に伝えられる。しかし子ども同士では関係をつなぐ役割を担う可能性がある。(家族 B)

引用文献

- たかぎとしこ(2009). わらべうたですくすく子育て みんないっしょにうたって遊ぼう
「うめぼしすっぱいな」 明治図書出版
高萩保治(1995). 現代の子どもとわらべうた
児童心理 49(13) Pp. 1424 - Pp. 1429